

一般社団法人

東洋音楽学会 沖縄支部通信 NO.41 (2020年3月31日発行)

Newsletter of the Okinawa Chapter, Society for Research in Asiatic Music

発行：(一社) 東洋音楽学会 沖縄支部

事務局：〒903-8602 沖縄県那覇市首里当蔵町 1-4
沖縄県立芸術大学音楽学部 小西研究室気付
<http://tog.a.la9.jp/okinawa/index.html>

【第73回定例研究会記録】

日時：2020年2月16日(日) 13:00~15:40
場所：沖縄県立芸術大学 首里当蔵キャンパス
奏楽堂講義室(奏楽堂ホール2階)

研究発表Ⅰ 高橋美樹

「沖縄県立芸術大学附属図書館田辺文庫所蔵・SP
レコード目録 一田辺尚雄旧蔵・最古の沖縄音楽レ
コードを探る」

■発表要旨

本発表では沖縄県立芸術大学附属図書館・田辺文庫所蔵の沖縄音楽 SP レコードを対象にレコード会社別目録を作成し、録音曲目のジャンル、歌手・演奏家について整理した。1915年~1958年に発売したレコードの変遷を辿り、近代沖縄における録音文化史の萌芽期を描き出した。特筆すべきは商業録音による最古の沖縄音楽レコード、1915年大阪蓄音器制作の SP 6枚を発見したことである。最古の沖縄音楽レコードについては高橋 2011【注1】で発表済みだが、2014年に田辺文庫で現物を確認した。以下、レコード会社別に解説する。

(1)1915年大阪蓄音器制作レコード6枚を発表者の分析概念に基づき分類した結果、古典6曲、沖縄民謡4曲、八重山民謡2曲、歌劇1作品となった。歌手・演奏家として古堅盛珍、高安朝常、城間恒有、安元詠勵、池宮城喜輝、屋良利禄、富原盛勇、宇利地

小カメ、永村清蒲が起用された。

(2)1917年日本蓄音器商会のレコード6枚(テスト盤)は古典2曲、沖縄民謡10曲、歌劇1作品であった。嘉手納良芳、新垣朝盛、前田ウサ小が起用された。

(3)1929年ニッポン・レコードのレコード2枚は琉球古典音楽演奏家・山内盛彬が訳詩琉球民謡(詩人・佐藤惣之助が琉球方言の歌詞を共通語に訳し山内が編曲)を発表する一環として録音された。川平喜久子(新姓は金井)と山内を起用し三線、太鼓、笛、四つ竹、玲琴を使用した。

(4)1934年沖縄音楽専門トモエ・レコードのレコード11枚には古典12曲、沖縄民謡1曲、八重山民謡5曲、新民謡2曲、組踊2作品、漫談2作品、願文1曲、不明1曲が収録された。又吉栄義、親泊興照、永村清蒲、糸数カメ子他を起用した。

(5)日本コロムビア・レコード 1934年録音14枚、1958年録音1枚には古典17曲、沖縄民謡4曲、宮古民謡2曲、八重山民謡4曲、新民謡2曲が収録された。古典安富祖流から金武良仁と古堅盛保、宮古民謡は友利明令、天久恵秀、八重山民謡は大浜津呂、崎山用能、仲本マサ子、他に芸妓の辰己初子、新崎マサ子を起用した。1958年 SP は山内昌徳が歌唱した。

(1)~(5)を整理すると、歌手・演奏家の人選に関して、古典は各流派を代表する演奏家、沖縄・八重山民謡は商業演劇で活躍した俳優や地謡、芸妓を起用した。三線、笛、太鼓、琴、胡弓など沖縄の楽器で

演奏されたが、新作の民謡にはバイオリン、ピアノなど西洋楽器を導入した。(1)(4)のレコードは那覇市の楽器店が録音し、製造は本土のレコード会社に委託した。沖縄では録音→製造→宣伝という基礎的な商業録音システムが1915年～1936年に成立していたことが明らかになった。

【注1】高橋美樹 2011「レコードに初めて録音された沖縄音楽—1915年『琉球新報』と大阪蓄音器の活動を通して—」『高知大学教育学部研究報告』71号、pp.229-242



(高橋美樹氏の発表)

■傍聴記

高橋美樹氏の発表は、戦前期を中心とした沖縄音楽のレコード音源についての包括的な調査報告であった。沖縄県立芸術大学図書芸術資料館「田辺文庫」所蔵レコードを中心として、以下の沖縄音楽レコード音源の収録曲目、演奏者等についての調査結果を詳述した。(1) 大阪蓄音機制作 SPレコード、(2) 日本蓄音機商会制作 SPレコード、(3) ニッポン・レコード制作 SPレコード、(4) 田辺文庫所蔵 SPレコード、(5) 日本コロムビア・レコード制作 SPレコード。これらはいずれも近代沖縄音楽について現存する貴重音源であり、当時の音楽界(古典音楽、民謡、新民謡他)の状況を明らかにするための膨大な情報が含まれている。それを細かくつぶさに検討してゆく高橋氏の研究方法は、慎重かつ実証的なものである。ただし全体としては、限られた発表時間に比して扱った資料が膨大すぎて、個々の資料の詳細について説明不足の感が否めなかった。取り上げる資料をもう少し絞った方がよかったのではないか。この

点については今後発刊予定という氏の論文を待つことにしたい。

ともかく沖縄音楽の初期録音音源に関する研究は、今のところ高橋氏の独壇場であり、近代沖縄音楽研究の中で、きわめて大きな価値を持っている。近いうちに、氏の初期沖縄音楽録音に関する研究論文を集大成した書籍の刊行を望みたい。

発表後の質疑応答では、各レコード音源に対する内容に関する質問や、曲名表記についての事実確認の他、特に高橋氏が紹介した「ご当地ソング」という説明について、以下のような議論が交わされた。

高江洲義英氏：標準語歌詞が付けられた《安里屋ユンタ》を編曲した宮良長包にとっては、「ご当地ソング」という以上の意味や葛藤があったのではないか。当時の沖縄社会における日本同化の圧力との関わりを考えていただきたい。また、《汗水節》のハヤシが紹介音源にはなかったが、いつからハヤシが入ってきたかについても追及していただきたい。

金城厚氏：そもそも標準語に直さなければ全国的に売れないので、これは沖縄差別とかいう以前の(音楽産業の)問題だと思う。宮良長包にしても山内盛彬にしても、「沖縄」という地域性を重視するか「日本全体」に売るという普遍性を採るかのバランスに悩んだ上での選択だろう。

久万田晋：《安里屋ユンタ》にしても、沖縄の文化問題として考えるのとは別に、日本の新民謡運動の延長線上の作品として捉える見方もできる。ピアノ伴奏という編曲手法も沖縄的な作品としては奇異に思われるが、中山晋平の新民謡的な流行歌《波浮の港》などと同列に捉えることもできると思う。

(報告：久万田晋)



座談会 「エイサーとチョンダラー再考」

問題提起：

小西潤子「エイサーは昆布と共にやってきた?!」

新城 亘（非会員）

「遊行芸能・京太郎（チョンダラー）の歌」

討論者：久万田晋

本座談会は、萌芽期の課題を投げかけて、参加者と共に議論する場とすることを意図したものである。まず、沖縄支部の小西会員が、沖縄の芸能として広く親しまれているエイサーやチョンダラーの成立史について、未だにほとんど明らかになっていないという問題を提起した。エイサーは沖縄の盆踊りであり、その成立には日本本土からもたらされた念仏とのかかわりが深いことは定説になっている。一方、現代エイサーに登場するチョンダラーは最近見られるようになったもので、『琉球国由来』

(1713)において「念仏」と別項目であげられている傀儡者「京太郎（チョンダラー）」とは直接の関係は見られない。これらを明らかにするためには、沖縄の念仏系詞曲と本土の浄土系仏教思想との影響関係の解明が待たれるとされる。そこで、小西会員は、日本本土から何度も複数のルートを経て念仏系芸能の伝来があったことを前提に、その1つとして、昆布の流通が盛んになった18世紀、越中呉西地方など北陸で流行した「目連尊者の地獄めぐり」をモチーフとするチョンガレ系盆踊りに注目した。砺波市鷹栖の《目連尊者》における「5才の年に父にはなれ、7才に母にはなれ、目連5才の年如来の御弟子になる…」という亡母と逢うために地獄をめぐるという出だしの部分は、沖縄の《継母念仏》（首里尋常小学校版）における「3つの頃に親戻て、5つになたくと親思て、国々様々巡れども…」と類似することを指摘した。一向一揆で知られる越中は、念仏聖による念仏系芸能が盛んであった。実は、チョンガレ系盆踊りが盛んな地域には、伏木や氷見の北前船寄港地を含む。これらの地域の芸能が、薩摩を経由する「昆布の道」を通って琉球にもたらされた可能性はないかと投げかけた。

新城亘氏は、遊行芸能者・京太郎（チョンダラー）の歌として、1. 万歳の芸能、2. 馬の芸能、

3. 人形の芸能、4. 念仏歌の芸能、5. 鳥刺し舞の芸能からなることをそれぞれの解説と歌の実演を交えながら紹介した。1の《扇舞》は、京太郎がお正月に王様の家を訪問することがうたわれている。《万歳こうし》の「穂祭り」の穂は麦の穂である。《升斗舞》の「一万一石一斗一合一勺」の部分は、長野県の毬つき歌にも見られる。2は新潟など日本本土では春駒になるが、沖縄では春駒は見られない。組踊『万歳敵討』《センスル節》では、「したりが、つやうあん、つやう…」は「シー」と言って追い払う、「ツォンツォン」とオノマトペの表現が含まれ、《馬舞者》では前原、小禄、那覇と沖縄の地名を伴う言葉遊びとなっていること、3. では、人形遣いを意味する傀儡が元々は傀儡草という薬草のことで、厄払いの意味があったこと、4. の《ミンマン念仏》《七月念仏》《仲順流れ》が京太郎の念仏に関わる芸能であり、親孝行や母親探しがテーマとなっていること、5. の鳥刺し舞の芸能では、地方によってあげられる鳥の種類が異なるが、種子島のものと沖縄のものとは「見一さいな」という言葉が共通しているなど、豊富な知識を披露した。また、関連資料として、現代エイサーのチョンダラーと京太郎（チョンダラー）を同名とすることに対して、エイサー関係者に「由来が異なるので呼称変更を」と要望する『琉球新報』「論壇」の記事（2013年7月24日）、本座談会直前の2月12日に開催された琉球フォーラムの記事（「琉球と昆布、近代化の源」講師：奥井隆、『琉球新報』2020年2月13日）を紹介した。

■討論

討論では、小西会員が進行役となった。まず新城氏より、東京にて児玉清子氏の京太郎（チョンダラー）芸能を観たことが研究のきっかけになったこと、その後、全国を歩いて関連芸能についての調査を行い、この芸能が祝福芸であること、言葉遊びがあること等の共通性を見いだした、との紹介があった。久万田晋会員は、小西会員がとりあげた「チョボクレ」の芸能における《目連尊者》と沖縄の《継母念仏》の詞章の類似性に関しては、これまで指摘されることがない画期的な成果であること、お釈迦様

の弟子の目連に関しては宜保榮治郎氏も言及しているが、そこでは袋中上人が目連経を元に琉球風に翻訳したと述べているにとどまる。袋中上人にエイサーの起源を求めることは、証拠がないことから、池宮正治氏や知名定寛氏は否定的である。チョンガレそのものが沖縄に来たかどうかはわからないが、中世の説教節にも注目する必要があると思っていたところだったので、いろいろな流浪芸能者がチョンガレ祭文のかたちで伝えたという可能性は高いと考えられる、という見解を述べた。その他、チョンガレのチョンが「ちよろける」「ちょうける」に由来すること、エイサーと八重山のアンガマーとの関係などに話題が及んだ。

会場からは、國吉清昂会員より、自らの父の年代には17番くらいからなる「親を亡くして…」といった念仏系の歌がエイサーに用いられていたと聞いている。今のようにいろいろな歌をうたってエイサーをしていなかった、という情報提供があった。上地正勝氏（非会員）からは、『具志頭村史』の中に坡名城集落の獅子はチョンダラーが伝えたときれ、秋田あたりにある鹿の頭をした獅子があると記されている、また麒麟獅子舞の中に《猩々》という演目があり、チョンダラーの演目と共通する、という情報提供があった。新城氏からは、当初は京太郎による異形の芸能と念仏者のように異形ではないものとは区別されていた、という見解が出された。久万田会員は、高知の場合だと仙台の伊達氏が来ているから東北の獅子舞がある。琉球だと、偶然漂着したのかも知れないと述べた。高江洲義英会員からは、新城氏が述べたように、チョンダラーとニンブチャーが別なものであることを明確にしておくべきである。《仲順流れ》は、歌劇の名称によって後に付けられた名称で、元は《七月エイサー節》と呼ばれていたこと、表演を伴う研究の重要性についての指摘等があった。山本千加子氏（非会員）からは、「住吉踊り」、インターネットで検索できるチョンガレ節、あほだら経との関連に関する質問があった。金城厚会員からは、北陸に着目した点は評価できるが、モノと情報の移動は同時だが人の移動は同時ではないので、北前船にどのような人が乗っていたかわかる資料をきたいしたいこと、長崎との関係も

考慮したらよいのではないかという指摘があった。

以上のように、沖縄支部会員数24名のところ、非会員も含めて23名が参加する中で、登壇者同士、登壇者と参加者が活発な議論を交わすことができた。その中で、エイサーとチョンダラーの成立史をめぐってのさまざまな興味深い情報が得られ、今後の課題も明らかになった大変充実した内容となった。

(報告：小西潤子)



(一社) 東洋音楽学会 沖縄支部通信 No.41 編集委員
長嶺亮子、古謝麻耶子、遠藤美奈、多和田真理
次号 No.42 は 2020 年 8 月に発行予定